

2023年3月12日 主日礼拝

説教題「しるしを求める信仰」ヨハネ福音書 2章 23～25節、4章 43～54節

主任牧師 加藤 誠

「イエスは役人に、『あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない』と言われた」(ヨハネ4章48節)

先週はヨハネ福音書 2章のエルサレム神殿で主イエスが羊や牛を売り買いしている人たちを追い出し、神さまの礼拝には「もう動物の犠牲は必要ない！」と宣言された場面に聴きました。そして、建物としての神殿に依り頼む信仰ではなく、十字架の主を通して神につながる信仰の大切さを受け取ったのです。

その礼拝の後で、質問を受けました。今朝と一緒に読みました「23節以下はどういう意味なのですか？」という質問です。エルサレムで主イエスがなさったしるしを見て多くの人がイエスの名を信じるようになったのに、そのことを主イエス御自身が喜ばれていないのはどういうことなのだろう？…という質問です。

そこで今朝は「しるしを見て信じる信仰」について、この箇所と4章の「王の役人の息子の癒し」の箇所を重ねながら聴いていきたいと思います。

まず2章24節「しかし、イエス御自身は彼らを信用されなかった」という一文ですが、岩波訳では「イエス自身は自分を彼らに任せることはしなかった」と訳されています。「自分を彼らに任せることはしなかった」ということがすなわち「彼らを信用しなかった」ということになるわけですが、主イエスは自分のしるし(奇跡)を見た人たちが、そのしるし(奇跡)をもって御自身のことを人々に証していくことを「任せなかった」ということではないかと思うのです。

なぜなら主イエスが神の子である「最大の決定的なしるし」は十字架だからです。水をぶどう酒に変えたり、病気を癒したりというのは、十字架にくらべたらほんの小さな、部分的な証しでしかない。「水をぶどう酒に変えてくれた」「病気を癒してくれた」というのはイエスが神の子である「決定的なしるし」ではないのです。それだけなら「人間の願いごとを叶えてくれる神さま」でしかないからです。もちろん主イエスは私たちの切実な願い(癒しや必要)を大切に受け止めてくださる方です。けれども、この世界を生きる私たちにとって一番大切に、一番切実な救いは、神の愛と赦しにつながることです。そして、私たち自身が神の愛と赦しを分かち合うものに変えられていくことです。その神の愛と赦しが決定的に示された十字架を知らずして、主イエスの働きのごく一部分だけで「イエスを神の子」としようとする人々に、主イエスは御自身を委ね、任せようとはされなかったのです。

実は似たような場面が6章の五千人に五つのパンと二匹の魚で満腹にされた場面にも出てきます。主イエスが分かち合うパンと魚で満腹した人々は奇跡をあらわ

してくれたイエスを「王」として担ぎあげようとしています。それを見た主イエスは「ひとりでもた山に退かれた」（6：15）のでした。奇跡的な力を発揮されたイエスを自分たちの王にしようとする人々の信仰に、主イエスは危うさを見たのです。自分たちの願い、要求を満たしてくれる「王」だけを求める信仰では、決して十字架の主と、神の永遠の愛と赦しと出会うことは出来ないからです。

ですから、主イエスは人びとの「しるし（奇跡）を見て信じる信仰」「しるしを求める信仰」に対して批判的な厳しい言葉をぶつけられたのでした。今朝の4章の「王の役人の息子を癒す」場面でもそうです。瀕死の息子をなんとか癒してほしいと頼みに来た父親に対して、48節「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」の言葉はとても冷たく聞こえます。けれども実はこの言葉は、この父親を「しるしを求める信仰」から「しるしを見なくても、言葉だけで神を信じる信仰」へと導くための言葉でありました。主イエスはカファルナウムの息子のところに自分を連れていくつもりだった父親に、ただ神の言葉だけを信じる信仰の大切さを教えられます。そしてこの父親は、自分が主イエスの言葉だけを受け取って自分の家に帰ろうとした「その時」に息子が癒されたことを知るので、「自分の願い通りに動いてくれる神を求める」のではなく、「私たちの願いを超えて、私たちに最善の救いを備えてくださる神を信じる信仰」を父親は学んだのでした。

私たち人間は弱いです。見えない神、神の愛を信じる信仰において、ほんとうに弱く、もろく、小さなものです。旧約聖書で信仰の偉人と呼ばれるモーセやギデオンでさえも神の言葉だけを信じる事が出来ずに「しるし」を求めています。新約聖書でも、神の言葉だけをいただいて、御言葉だけを握りしめて立つて行こうとするのは、イエスの母マリアくらいではないでしょうか。マリアは何のしるしも求めることなく「ただお言葉どおりこの身になりますように」と応えたのでした。

それだけ神さまという方は、私たち人間の理解できるキャパシティをはるかに超えた大きな方だということでもあります。十字架の出来事も弟子たちには衝撃でしたけれども、墓に葬られた主イエスが復活されるなどということは、弟子たちの理解をはるかに超えた神の業でした。弟子のトマスは、とても信じる事が出来ませんでした。「俺はこの手を主イエスのわき腹に入れないと信じない！」とごねたのです。けれども、その信仰薄きトマスのために、主イエスは復活の命をあらわし、トマスに語りかけられました。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる者は幸いである」「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」と。

しるしを求め、しるしを見ないとなかなか信じることのできない信仰薄き私たちために、今日も主イエスは寄り添い、共に歩み、見えない神を信じ、十字架に神の愛と赦しを受けていく信仰に招いておられます。「あなたも、見て信じる者ではなく、見ないで信じる者、神の言葉を握りしめ生きる幸いを学んでいきなさい」と。